

# 短期大学における学生支援の充実について ～目的意識が多様な学生を受け入れている学科における セミナー&チューター制を中核とする支援～

廣兼 孝信

(広島文化短期大学コミュニティ生活学科教授)

先日、卒業生の〇君から電話があった。彼はこの春卒業し、近隣の四年制大学の三年次に編入学をした。在学中は授業を欠席しがちで、履修登録をしても途中でやめてしまうことが多かったので、チューターとしてずいぶん苦勞をさせられた。進学先でちゃんとやっているだろうかと心配をしていたが、何の連絡もないまま五か月が過ぎていた。

久しぶりに聞く電話の声は元氣そうであった。「近況報告をしようと思つて…」という言葉からはじまつて、進学先での様子をひとしきり話した後、「実は…」と切り出した。「もうすぐ彼女との記念日なのですが、何をプレゼントしたらいいでしょうか…」彼の突然の電話の目的はこれだったのである。

〇君のように卒業後もチューターにアドバイスを求めてきたり、ひよっこ研究室を訪ねてきて近況報告をしてくれる卒業生は多い。これはセミナー&チューター制による効果が大いと考えている。

セミナー&チューター制とは

広島文化短期大学コミュニティ生活学科は、生活(家政)系の学間を基礎としながら、ファッション、フード、ビジネス、クリエイトなど多彩な領域の専門知識・技術が学べる学科である(定員八七名、専任教員九名)。

平成一五年度に生活文化学科と生活科学科生活科学専攻

を改組して開設し、同時に(財)短期大学基準協会から地域総合科学科(従来の学科のように内容を特定分野に限定せず、地域の多様なニーズに柔軟に応じることを目的とした

新しいタイプの学科の総称)として適格認定を受けている。この学科には、様々な目的を持った学生が入学しているが、本学が平成九年度に導入したセミナー&チューター制

が、この学科における学生支援の中核を担っている。



セミナー風景

セミナー制度(各専任教員が少人数グループを対象として自分の専門分野に関する研究や制作等の指導を行う方式)も、チューター制(各専任教員が少人数グループを対象として履修や進路の相談をはじめ学生生活全般にわたってサポートする方式)も、多くの大学・短期大学が採用している。しかし、本学では、セミナーの指導教員がチューターの役割も同時に果た

し、入学から卒業まで継続して同じ学生の面倒を見ている。セミナーは他の授業と同様に週一回（一年生は水曜日の三コマ目に、二年生は木曜日の四コマ目に）開かれている。内容や進め方は各教員に任されているが、おおまかに言えば、一年生のうちは生活指導を中心としながら、並行して徐々に研究・制作の基本を学ばせ、二年生になると本格的な研究・制作を開始させ、最終的には「卒業報告」という形にまとめさせている。

このように教員は、研究（あるいは制作）指導と生活指導を通して学生一人ひとりと二年間密接にかかわり続け、結果として、学生と教員との間に強い信頼関係が築かれるのである。

導入のきっかけ

セミナー&チューター制の導入のきっかけの一つは、本学が全国に先駆けて平成九年から実施したAO入学制度にある。学びたいという意欲を重視して入学を決定した者に対して、入学後の受け入れ及び支援体制を整えておく必要があった。つまり、高校での成績（調査書）を見ず試験も課さないで入学させた者を、だれがどのように責任を持つ

て卒業まで面倒をみるかを明確にしておく必要があった。

また、コミュニティ生活学科の前身である生活文化学科と生活科学科生活科学専攻においては、学生の目的意識が多様化するとともに、無目的で無気力に近い学生の入学も増えはじめ、それまでのクラス制（一人の教員が約40名の学生をサポートする）による支援が難しい状況にあった。

この二つの課題を解決する方法について検討を重ねた結果、セミナー&チューター制が生まれたのである。学生支援の主体をクラス主任からセミナー担当者（すなわちチューター）に移行させたことよって、教員は学生一人ひとりについてより深く理解できるようになった。そして、学ぶ意欲があり目的意識が明確な学生に対してはその目標の達成をサポートし、目的意識の低い学生に対しては目標を一緒に見つけていくといった、それぞれの学生に合わせたきめ細かい対応ができるようになった。

なお、セミナー&チューター制導入後もクラスを二つに分け、クラス主任を配置している。その役割は、学科の学年行事（入学直後のオリエンテーション、オリエンテーション・キャンプ、学期末学年別集会等）の企画・実施等で、学科の学生全体にかかわる支援の部分で中心的役割を果たしている。

セミナー（チューター）の決定方法

本学では、入学式の翌日から三日間かけてオリエンテーションを実施している。コミュニティ生活学科では、オリエンテーションの初日に教員紹介を含めてセミナーの内容（二年間でのどのような学習をするのか、どのような目標を持った学生を支援できるか等）をしっかりと説明している。学生たちは、教員の専門領域だけでなく、その個性を知ろうと真剣に聴いている。

ここで特筆すべきことは、目標が不明確な学生を募集するセミナーが存在している点である。進学率の高まりに伴い、まわりがみんな進学するからという理由で入学していく学生が毎年いることは否定できない。このような学生に対して、一年前期の間は興味のある科目を履修させながら、チューターと一緒に目標を見つけていくようにしている。

第二日目では、二年間の履修計画を立てさせている。本学科のカリキュラムはフィールド&ユニット制（後述）を採用しているので、科目の選択の幅がかなり広い。そこで教員は、学生の将来の夢（就職等）に合わせて、それが実現できるような科目選択の例（いわゆる履修モデル）を提

示している。学生は、その履修モデルやシラバス（授業計画）を参考にしながら、自分なりの履修計画を立て、それを支援してくれるチューターを探す。教員は、学生の将来の夢や履修計画を見ながら、だれがチューターとしてふさわしいかについて助言をしていく。そしてこの日のうちにセミナー（チューター）が決定される。第三日目では、チューターとの集いを開く。ここで学生は履修計画に対するチューターからの助言を受け、見直しを行った上で前期に履修する科目を決める。

もう一つ特筆すべきことは、セミナーの人数制限を行っていないことである。その結果として、表1のように、教員が受け持つ学生数に大きな差がある。このような差が出

表1 セミナー別の学生数  
(コミュニティ生活学科・平成17年度)

セミナー	1年生	2年生	計
A	19	18	37
B	8	7	15
C	0	6	6
D	19	11	30
E	16	12	28
F	11	10	21
G	1	3	4
H	5	5	10
I	11	11	22
計	90	83	173

ることに当初は様々な議論があったが、人数制限をして無理に希望を変更させると学生の満足度・やる気にマイナスの影響を与える事実を何度も経験しているので、この姿勢を貫いている。

なお、セミナー（チューター）は、四月末（前期履修登録最終決定時）、九月末（一年前期終了時）、三月末（一年次終了時）に変更できるようにしている。学生自身の目標変更、チューターとの相性の問題、セミナー内の友人関係のトラブル等により、毎年数名が変更している。このようなきめ細かな柔軟な対応が、学生支援の立場から重要であると考えている。

学生支援に有効な二つのアプローチ

全学的に実施している「学生自身による自己点検・評価」と「欠席カード」も、学生支援において欠かせないものになっている。

本学では、「自立」をテーマとして教育を展開し、「経済的自立（＝就職すること）」をめざす教育と「精神的自立（＝成人になること）」をめざす教育の両方に取り組んでいる。学生自身による自己点検・評価は、この流れに沿って

「欠席カード」を受け取ったチューターは、セミナーの時間等を利用して当該学生と個別相談を行い、授業を休んだ理由や学生自身の状況を把握している。

セミナーは毎週一回開かれているので、その時間に休んだ学生にはチューターがすぐに連絡を取るようになっているが、それだけでは学生が抱えている問題に気づかないこともある。「欠席カード」が何枚も届いたとすると、それは明らかに何らかの問題が発生しているシグナルであるし、休学や退学の意思表示の意味を持つ場合もある。したがって、非常勤講師を含めて全授業担当者の協力によって実施されている「欠席カード」は、問題を抱える学生の早期発見、早期対応のための重要な情報となっている。

九月の卒業式

コミュニティ生活学科の前身である生活文化学科では、平成一二年から何度か、卒業に必要な単位数を二年間で取得することができずに卒業延期になった学生の卒業式が九月に行われている（表2）。ケースBやGのように、休学を挟んで卒業するまでに三年半かかった場合もある。休学したり単位不足により卒業延期になったりすると、卒業へ

平成六年から開始している。ちなみに、教員による自己点検・評価は平成四年から実施している。学生自身による自己点検・評価は、具体的には、入学後にまず「卒業時の理想像」を記述し、毎学期の始まりにその理想像に近づくための具体的な目標を「学業の達成」、「精神的自立」、「価値観の形成」、「社会への適応」、「経済的自立」に分けて立て、毎学期末にその達成度を自己評価するといふものである。このヒントになったのは、ある教員が「学生に自分の目標を書かせ、学生がその目標へ向かう道から逸脱しかけたときに目標を再確認させ、適切な助言を行う」という指導を取り入れたところ、学生が素直に助言を受け入れるようになったという実践例であった。各チューターは、学生の自己点検・評価表を見ながら学生一人ひとりの目標を把握し、それが実現できるように側面からサポートしている。

一方、学生が何らかの問題を抱えると授業を休みがちになるので、本学では開学まもない昭和四二年から学生の出欠状況の把握に努め、学生支援の糸口としていた。そして、昭和五七年から「欠席カード」の活用を始めた。具体的には、授業担当者（非常勤講師も含む）は、学生の欠席が三回を超えると「欠席カード」に欠席日を記入してチューターに連絡する（以降、欠席が六回になるまで毎回記入する）。

表2 2年半以上かけて卒業した学生の経緯（生活文化学科）

ケース	入学年	卒業年月	卒業までの経緯
A	平成10年	平成12年9月	単位不足により卒業延期。不足分を半年かけて取得した。
B	平成10年	平成13年9月	2年次の4月から半年間休学。復学後、残りの単位を2年かけて取得した。
C	平成11年	平成14年3月	単位不足により卒業延期。3年目の4月から半年間休学。復学後、不足分を半年かけて取得した。
D	平成11年	平成14年3月	2年次の4月から1年間休学。復学後、残りの単位を1年かけて取得した。
E	平成12年	平成14年9月	単位不足により卒業延期。不足分を半年かけて取得した。
F	平成13年	平成16年3月	単位不足により卒業延期。不足分を1年かけて取得した。
G	平成13年	平成16年9月	単位不足により卒業延期。3年目の10月から半年間休学。復学後、不足分を半年かけて取得した。

の意欲が失われがちになるが、セミナー&チューター制により学生の個性を知りつくしたチューターが学生の状況に合わせて適切な助言やサポートを行うことよって卒業まで導いている。九月にたった一人だけのために挙行される卒業式で「卒業できてよかった」と涙する学生の姿は、すべての苦勞を忘れさせてくれる。

本学科においても、現在同様の事態が発生している。平成一六年度に入学した学生のうち一人が二年前期を休学していたが、チューターが学科の教員と連携しながらねばり強くサポートを続けたことにより、一〇月から復学し一年かけて残りの単位の取得をめざすことになった。おそらく、また来年の九月には一人だけの卒業式が行われることであろう。

重要度を増した履修支援

コミュニティ生活学科は、開設一年後にコース制を廃止してフィールド&ユニット制を導入するという、大幅なカリキュラム改編を行った。これは、地域総合科学科として、これまで以上に多様な目的を持った学生を幅広く受け入れるという使命を果たすためである。

しているのがチューターである。

地域総合科学科として、多様な目的を持った学生を受け入れるために科目選択の幅を広げることは重要な取組の一つであるが、それにはしっかりと履修支援体制が確立していることが前提である。フィールド&ユニット制を導入できたのは、セミナー&チューター制というシステムが機能し、履修支援もその中できちんとできると確信していたからである。

学生が好きであること

コミュニティ生活学科の学生を見ると、自分のことをちゃんと見てくれる相手を常に見ている者が多いと感じる。それは、友人関係が壊れることを極端に恐れ、そうなった場合のダメージが非常に大きいことにも現れている。また、ふだんは明るく活動的に見える学生も、その心の中に不安感や自信のなさが隠れていると感じることも多い。

このような学生を受け入れて二年間で教育していこうとするとき、まず必要なことは、安心感を生み出すことではないか。大学の中で自分をわかってくれ失敗してもサポー

フィールド&ユニット制は、香蘭女子短期大学で最初に考案されたシステムであるが、本学科ではこれを少しアレンジしている。具体的には、専門科目をベーシック、ファッション、フード、ビジネス、クリエイト、検定の六つの分野(フィールド)に分け、ファッション、フード、ビジネス、クリエイトの各フィールドでは、関連性の強い二科目をセット(ユニット)として履修させることよって学習効果を高めるようにしている。これにより、学生は自らの将来に有効と思われる科目(ユニット)を各フィールドから自由に選択し、自分独自の履修計画が立てられるようになった。

しかし、フィールド&ユニット制は、科目選択の自由度が高いという点で優れているが、コース制のように体系的な学習が保証されていない。本学科では、卒業要件として、専門必修科目一二単位、専門選択科目三八単位以上と規定している。もし選択科目を学生の自由に選ばせてしまうと、何のためにその科目(ユニット)を選択するのかを考えずに、単純に好きなものだけを選ぶ危険性が大きい。この欠点を補うために、学生の目標(卒業後の進路)別に参考となる履修モデルを提示し、目標の達成に向けた体系的な学習(科目の選択)を促す指導をしている。その役割を果た

トしてくれる人がいると確信できると、学生は安心して自分の目標に向かって階段を登りはじめる。それはかつての大学生のイメージからはほど遠いが、これが現実なのである。セミナー&チューター制は、このような学生を受け入れて育てていくために適している。地方の小さな短大の生活系を基盤とする学科が、大学全入時代にあつて学生を集めているのは、この点が評価されているからに他ならない。

しかし、セミナー&チューター制にも欠点はある。たとえば、セミナーへの帰属意識が強くなりすぎて学科への帰属意識が弱いこと、セミナー内だけの狭い人間関係に終始しがちでその関係が壊れたときの対応が難しいこと、それに何と言っても、手間と時間がかかることである。各教員は、入学したての一年生の面倒を見ながら、同時に二年生の就職活動支援や研究・制作の指導を行う。このようなことを毎年繰り返すのであるから、気が休まる時がない。

そのような状況において、教員は、お互いの悩みや苦しみを共有し、一体となって学生を支援している。そこに共通するのは、学生が好き、成長していくことが楽しみという気持ちである。それが根底にあるからこそ、本当の学生支援ができるのだと思っている。